

療観察期間を持ち、その間に再発して来なければ complete response (CR) と判定した。

【結果】 GCAP で HCV を減量後、IFN のみの治療を開始し、UC の増悪を防ぎつつ HCV を減量する目的で、GCAP を週 1 回継続したところ、UC の増悪を見ないまま 1 週目で HCV を陰性化でき、かつ 24 週間 IFN 治療を完遂できた。また、IFN 治療終了 24 週間後において慢性 C 型肝炎 IFN 治療 CR を確認できた。また、G-1 カラムによる顆粒球吸着療法による副作用は全くなかった。

【考察】 本治療の連続使用後のインターフェロン治療は、早期に HCV を陰性化し、その抗ウイルス効果を引き上げる可能性が示唆された。

13. セルロース膜からの (1→3)-β-D-グルカン (BG) 溶出と biological effect の検討

大畑 淳*1・宇佐美眞*1・岸本和徳*1・水野雅史*2
堀内 孝*3・長澤幸一*3
神戸大学医学部保健学科*1
同大学院自然科学研究科*2
東亜大学工学部*3

血液製剤中の (1→3)-β-D-グルカン (BG) 高値とセルロース (CE) 製 depth 膜からの溶出を報告した (Transfusion 42; 1189, 2002)。今回は、CE 膜溶出物の解析とその biological effect の解析を行った。

【目的】 1) CE 膜溶出液中多糖の分子量解析、2) 膜溶出物のマクロファージからの炎症性サイトカイン分泌への影響。

【方法】 CE 膜 7 種 (EK, EK 1 P, EKSP, Milligard CWSS, LA, LP, SP), ナイロン膜 1 種 (Ultipor N₆₆) を蒸留水中で 24 時間振盪し、BG 濃度をファンギテック G テスト MK で測定した。BG が高値であった EK 溶出液中の分子量を gel permeation chromatography (GPC) により解析した。マクロファージ株細胞 Mono Mac 6 を用い、LPS 添加あるいは非添加の培養上清に BG を含有する各種溶出液を添加し、24 時間後の培養上清中の TNF α , IL-1 β 濃度を ELISA により測定した。

【結果】 膜から 0~43,609 pg/ml の高濃度 BG 溶出液が得られた。GPC 解析では、MW 21975 に 1 ピーク、MW 3,000~4,500 に 2 ピークが検出された。LPS 添加下では、EKSP 液は TNF α をコントロールの 119% に促進し、LP 液は TNF α を 74% に抑制し、Ultipor N₆₆ 液は IL-1 β を 115% に促進した。サイト

カイン産生と BG 濃度には明らかな相関は無く、膜によってその効果は異なった。

【結語】 膜溶出液中には高分子量の物質が存在し、マクロファージからの炎症性サイトカイン分泌を変化させる。

〈特別シンポジウム〉

S-1. PMX 小型カラムと CHDF 直列施行が有効であった成人敗血症症例

江口 豊*1・中居弘一*2・森田恭生*2・高橋 完*1
藤井応理*1・遠藤義裕*3・花澤一芳*3・谷 徹*3
松田昌之*2・野坂修一*1
滋賀医科大学集中治療部*1, 同脳神経外科*2
同外科学講座*3

第 22 回日本アフェリシス学会学術大会において、PMX-05 R と CHDF 直列施行が有効であった小児の敗血症 (エンドトキシン血症) 症例を報告した。今回、血中エンドトキシンは検出されなかったものの、成人の敗血症症例に有効であったので報告する。

【症例】 53 才の男性。平成 14 年 5 月 29 日、2 階より転倒し肺挫傷・多発肋骨骨折、脳挫傷・硬膜下血腫を認め、開頭下血腫除去術施行後、脳低温療法を開始した。復温終了の、6 月 3 日、NA 0.04 r+DOA 5 r+DOB 2 r にても BP 70 台で、CRP 35.04 mg/dl、血小板 4 万/ μ l であった。肺炎あるいは BT による敗血症・DIC と考えられたため、PMX-05 R+CH 1.0 L を QB 80 ml/min, QD 400 ml/h, QF 500 ml/h, 除水 0 ml/h で 3 時間、その後 CHDF のみを施行した。開始後 BP の上昇、尿量の増加が認められ、NA 投与から離脱しえた。なお、血中 Et は施行前後で検出されなかった。

【結論】 PMX 小型カラムと CHDF 直列による血液浄化法は、重症敗血症性多臓器不全治療に有用と考えられる。

S-2. エンドトキシン吸着 (PMX) 施行時間の検討

山下千鶴・武智健一・外間之貴・高崎康史
新田賢治
市立宇和島病院麻酔科

[はじめに] PMX カラムは、エンドトキシン吸着カラムとして 1996 年に発売され、現在では infection induced SIRS に広く使用されている。しかし、現在推奨されている 2 時間施行が適切な施行条件かどうか、

未だ検討されていない。今回、我々の施設で数年前より行ってきた PMX 長時間施行のデータを retrospective に解析し、長時間施行が勧められる病態やパラメーターについて検討した。

〔対象〕 96年から02年8月までに当院ICUでPMXを施行した41例。男性30例、女性11例。年齢は21歳から86歳、平均64.7歳。

〔結果、考察〕 ①血圧は2時間施行中に改善したが、ARDSを合併した症例ではPaO₂/FIO₂ (P/Fratio) の改善は2時間では認められなかった。②エンドトキシン血症救命治療研究会の多施設臨床研究の2時間施行群と比較すると、P/Fratioは2時間後には両群とも横ばいで、その後長時間施行群のほうがより高度に改善した。血圧の上昇は、両群とも2時間後には同程度改善し、その後、長時間施行群では終了時まで、2時間施行群より大きく改善した。③炎症残存群では、炎症除去群に比べ、血圧もP/Fratioも改善を認めるのに長時間必要とした。

S-3. エンドトキシン陽性例に対するエンドトキシン吸着療法の有効性

安宅一晃・嶋岡英輝・徳平夏子

大阪市立総合医療センター集中治療部

グラム陰性菌による敗血症性ショックはエンドトキシンの関与が予想され、エンドトキシン吸着療法が施行されている。しかし、血中エンドトキシン値の測定が曖昧で本治療法の適応基準、効果判定は未だに確立されておらず、臨床的な基準で開始しているのが現状である。これらの症例の血中エンドトキシン値は開始前から陰性であることが多く、エンドトキシンが除去されて効果があるのかもどうも曖昧である。今回、当院でエンドトキシン吸着療法施行前に陽性であった症例について効果を検討した。

〔対象と方法〕 2002年11月までにエンドトキシン吸着療法を行った症例は116例であり、施行前の比濁時間法によるエンドトキシン値が測定できた症例は68例であった。施行前のエンドトキシン値が1pg/mL以上の陽性例17例を対象に循環動態の改善、予後について検討した。

〔結果と考察〕 対象例のうち生存は10例であった。血中エンドトキシン値がエンドトキシン吸着療法施行後に陰性化した10例は全例循環動態の改善を認め、逆に陰性化しなかった7例は循環動態が改善も認められなかった。エンドトキシン値が本治療法の適応基準、

効果判定になりうると考えられる。

S-4. PMX 治療での SLP テスト変動の検討

田畑貴久・清水智治・花澤一芳・遠藤善裕
阿部 元・森 毅・谷 徹
滋賀医科大学医学部外科学講座

〔背景〕 Silkworm Larvae Plasma (SLP) test はグラム陰性菌・グラム陽性菌などの原核細胞の壁成分である peptidoglycan (PG) と、真菌中 1-3- α -Glucan を測定する方法である。これまで我々は、SLP テストの感染症診断の有用性について報告し、重症患者での予後指標として用いることができる可能性について報告した。今回、PMX 治療での SLP テストの変動について検討した。

〔方法〕 PMX 治療を施行した症例について PMX 治療前、直後、24 時間後の血中 SLP 値について検討した。

〔結果〕 血中 SLP 値は、治療経過と共に有意に低下を認めた。死亡群と生存群で検討すると有意差は認めないが、死亡群の方が最終的に高値で推移する傾向にあった。

〔まとめ〕 PMX 治療経過中に SLP テストを測定することにより予後指標として評価できる可能性が示唆された。治療経過にて血中 SLP 値が低下するメカニズムと生体に対する影響については今後検討を行う必要があると考えられた。

〈特別講演〉

G-1 カラムアフェレシス治療併用による 高 HCV 血症患者における インターフェロン・リバビリン治療増強効果

澤田康史

兵庫医科大学消化器内科

【目的】 高 HCV 血症を伴う C 型慢性肝炎患者にアダラム治療を併用することにより、インターフェロン (IFN) とリバビリンの治療効果を増強するかどうか検討した。

【方法】 本臨床研究前半以内に施行された肝生検で、慢性肝炎であることを組織学的に証明でき、かつ、他の免疫が関与する肝疾患群 (自己免疫性肝炎、原発性胆汁性肝硬変、原発性硬化性胆管炎など) や悪性疾患を除外でき、genotype が主に 1b, (2a, 2b でも良い) の高ウイルス血症 (100 KIU/mL 以上) と